

# わが国の焼き芋関係年表

井上 浩

- 1605 (慶長10) 沖縄本島の野国村(嘉手納町)の野国總管、中国南部の福建省の蕃薯を持ち帰り試作。それを儀間真常が広める。
- 1609 (慶長14) 薩摩藩、琉球王国に侵攻、同国を服属させる。
- 1615 (元和1) 平戸のイギリス商館長、リチャード・コックス、リュウキウイモを入手、試作。
- 1696 (元禄9) 宮崎安貞の『農業全書』成る。刊行は翌年。同書の「蕃薯」の項に「薩摩長崎にては琉球芋、又赤芋と云って多くつくると見えたり」とある。
- 1697 (元禄10) 種子島の島主、種子島久基、琉球王より琉球芋を入手し試作。
- 1705 (宝永2) 薩摩半島の山川町の船乗り、利右衛門、琉球より琉球芋を持ち帰って試作。これがその後急速に普及。
- 1719 (享保4) この年来日した朝鮮通信使の製述官、申維翰の『海遊録』に京都郊外の焼き芋屋の情景がある。江戸に向かう一行が京都から大津へ向かった9月12日のこと。小さな峠を越えたところに道をはさんでたべものの店が並び、「それぞれ酒、餅、煎茶、焼き芋を用意して路傍に並べ置き、通行人を待って銭をかせぐ」とある。
- 1732 (享保17) 享保の大飢饉。この年、石見大森銀山領の代官、井戸正明、薩摩よりサツマイモの種芋を入手。領民に試作させたが失敗、飢饉には間に合わなかった。
- 1735 (享保20) 青木昆陽、江戸でのサツマイモの試作に成功。
- 1751 (寛延4) 南永井村(埼玉県所沢市)の名主、吉田弥右衛門、サツマイモの試作に成功。これが川越いもの作り初め。
- 1789 (寛政1) 大坂の文人、珍古楼なる人のサツマイモ料理集『甘藷百珍』出る。その絶品は11種類。その中に「塩焼いも」と「塩蒸やきいも」の二つもの焼き芋あり。
- 1793 (寛政5) 江戸に初めて焼き芋屋が現れる。焼き芋は江戸っ子に受け、冬のおやつといえればそれになった。最初は「ほうろく」を使ったが、やがて大きな「かまど」に鉄の浅い平鍋を置いて焼くようになった。
- 1868 (明治1) 明治維新で世相は一変したが、焼き芋屋は繁盛した。
- 1923 (大正12) 関東大震災。震災後、焼き芋屋は振るわなくなった。
- 1929 (昭和4) 中国より「つば焼き」が伝来。
- 1941 (昭和16) 太平洋戦争始まる。
- 1950 (昭和25) 東京に石焼き芋屋が現れる。最初はリヤカー式だった。
- 1970 (昭和45) 大阪万博。それを機にファーストフードの店が激増。石焼き芋は振るわなくなった。

## 紹介

### 「川越いも友の会」



1984年(昭和59年)3月に発足。目的は「川越地方のサツマイモ伝統文化を保存するための市民活動」と「サツマイモ愛好者や研究者、業者などを結ぶ文化活動」である。発足の当初は、シンポジウム、川越いも祭、市民サツマイモ作り農場、講演会、料理講習会、見学会、派遣交流会などを活発に行い、その多彩な活動から、イモの復権運動とまで言われた。

編集・発刊した小冊子は、過去に、『昭和甘藷百珍』(1984)、『川越甘藷百句集』(1986)、『川越いもソング集』(1987)、『川越いもQ&Aガイド』(1987)、『川越版さつまいも・いも味読本』(1987)、『現代中国のサツマイモ事情』(1991)、『紅赤の100年』(1997)、『アメリカ サツマイモ事情』(1999)、『イラスト吉田弥右衛門物語』(2001)、『懐かしのサツマイモ「太白」物語』(2002)などがある。

1987年(昭和62年)には、全国に向け「サツマイモの日」(10月13日)を宣言。そのような活動が認められ、1991年に「農村地域文化賞最優秀賞」「サントリー地域文化賞」「国際サツマイモシンポジウム文化振興賞」など、1992年に「埼玉県文化ともしび賞」を受賞。また、1989年(平成元年)に「サツマイモ資料館」の開館に協力し、1995年(平成7年)には戦後50周年を記念した「川越さつまいも地蔵尊」の建立を支援し、新観光名所づくりに貢献した。

現在、会員約40名

会長：ペーリ・ドゥエル

### 「川越いも友の会 事務局」

〒350-2215 埼玉県鶴ヶ島市南町1-14-18

山田英次宅 ☎049-286-7379